

黒毛和種子牛に対する放牧試験（第1報）

○加藤聡・立山松男・中園締二・日高和幸
（宮崎畜試）

【目的】

昨今、耕作放棄地や水田を活用した牛の放牧が見直されてきており、本県においてもその実施数が増えてきている。

これらの放牧のメリットは、耕作放棄地の解消や、農業・農村の活性化や景観の保全、さらに飼養管理の省力化など、多岐にわたっている。

また、最近では黒毛和種の親子放牧が注目を浴びており、子牛への放牧利用についての検討が必要とされてきている。

今回、黒毛和種子牛の放牧における影響を調査するため、子牛のみの放牧にスポットをあてて試験をした。

【材料および方法】

供試牛は場内産黒毛和種子牛を使用し、試験区・対照区ともに、8週齢までは代用乳6Lを上限に、人工乳および粗飼料は飽食とした。試験区分は第1表のように設定した。

第1表 試験区分

区分	頭数	性別	8週齢以降の飼養方法
試験区	2	雄1,雌1	放牧(7ヶ月齢からは舎飼い)
対照区	2	雄1,雌1	舎飼い

試験区については、哺乳期間終了後より7ヶ月齢まで放牧とした。

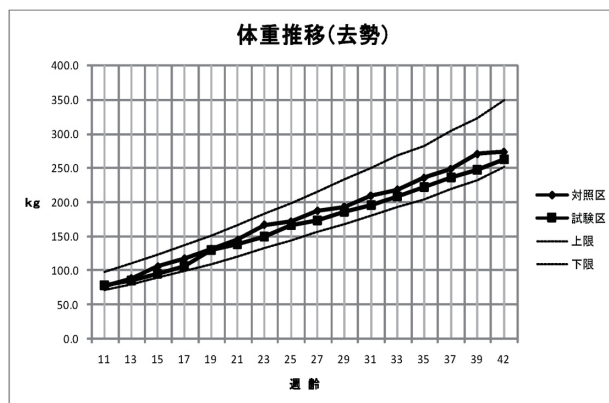
調査項目は、体重、体高、胸囲、腹囲、血液成分とした。

【結果および考察】

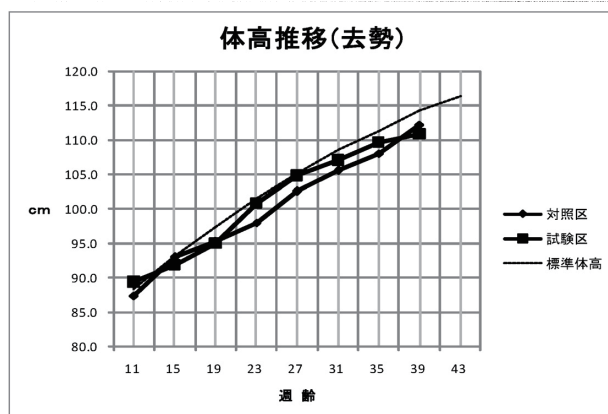
第1図に去勢の体重の推移を示した。試験区、対照区とも生時体重はほぼ同値であったが、離乳後の発育においては、若干対照区の方がよく、その後は全体的に対照区の方が試験区よりも上回って緩やかに推移した。

第2図に去勢の体高の推移を示した。18週齢以降、試験区の伸びが大きく、対照区を上回っていたが、37週齢で対照区が追い越した。

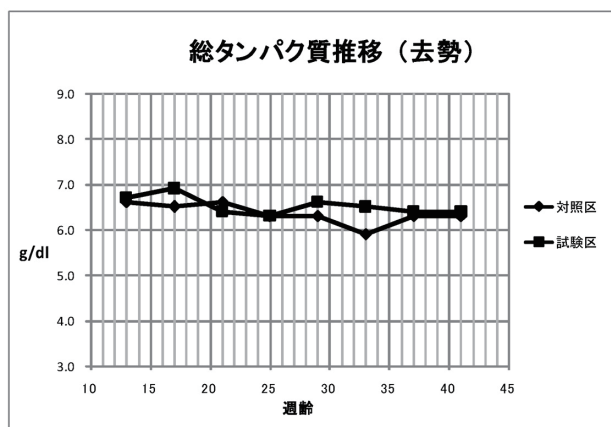
第3図に去勢の血液成分（総タンパク質）を示した。総タンパク質では、試験区の方が若干高く推移しているものの、両区において正常値の範囲以内となった。



第1図 去勢の体重推移



第2図 去勢の体高推移



第3図 総タンパク質の推移(去勢)

今回は7ヶ月齢までの放牧であったが、大きな問題が無かったため、子牛のみの放牧は可能と考えられた。今後は、試験数を増やしてさらに検討する必要があると思われる。